「第21回 CORD CONFERENCEに参加して」

お茶の水女子大学大学院
三　上　賀　代

● 64プログラム，5日間の国際会議

昨夏7月13日から17日まで，カナダのトロントで，第21回 International CORD Conference（the Congress on Research in Dance）が開催された。この会議に招待され，国際交流基金の援助を得て渡加できたことは，4月にお茶大大学院（舞踊教育専攻）に入学，舞踊研究に着手したばかりの私には，大きな喜びであった。私に課せられたことは，私の研究テーマである〈舞踏〉のワークショップを行なうことであった。正直なところ，国際会議など初めてのことだけに不安もあったが，舞踏の創始者，土方巽の下で学んだということが支えとなった。亡き土方巽が，私の国際会議出席を知ったら，さぞや地下で苦笑を浮かべているだろう…そんなことを考えながらのカナダ行きだった。

会議は，トロントの格式高いキング・エドワードホテルを会場に，日米英仏加等参加10余カ国，参加人数約200名，レクチャー，シンポジウム，ワークショップ等64プログラムが，連日早朝8時から夜10時まで同時多発的に進行するというものであった。

以下，舞踏のワークショップを中心に，印象に残るものを報告したい。

●舞踏のワークショップ

プログラム "Butoh Workshop; The Primal Body" は会議4日目，舞踏家・中嶋夏[※1]さんと私が担当した。ブトーに関しては前日にニューヨークのアジアソサエティのディレクター Bonnie Sue Steinさんが，"Butoh; An Illustrated Lecture" として，土方巽，大野一雄，田中珉，芦川羊子，中嶋夏，山海塾等のスライドを上映し，紹介してくれていた。山海塾のメンバーが，カナダでビルから宙吊り中，落下死亡した事件は，それまでブトーに関心のなかった人たちにも興味をも与えていたようであった。「'暗黒'の意味は？」「何故，白塗りをするのか」「音楽は西洋のものを多く使っているが，何故か」等の質問があった。またいくつかのシンポジウムやレクチャーの中でもブトーは取り上げられ，東洋文化におけるソマティックアプローチの一助としてブトーが択えられている感があった。こうした背景の下に，私たちのワークショップは行なわれたので参加者たちには強い期待があったように思われた。

参加者17名，見学者10余名である。

彼らを前に，まず〈暗黒舞踏〉の成立と歴史的意味，その特徴及び自分たちの立場を簡単に説明した後，早速動きに入った。

一般的に暗黒舞踏は即興性が強く，決まった型などないように考えられているが，土方の暗黒舞踏には，彼独自のメソッドがあると私には考えられる。具体的には，土方の名づけた，「花子の顔」「ミショーのひげ」といった顔，手，足の身体区分における型がある。そして，そのディテールを彼独自の身体の流れの方法を使って積み重ねて行くことでプロットや作品を作りあげるのだが，今回のワークショップで，私たちが行なったのもこの方法による。

以下にその経緯を記す。

イントロとして，身体ほぐしの意味を含め，神経症的なボーカル音を，子供のように感じたままに動くよう指示する。意識的なる肉体を取り除き，感応すべき音と肉体自身に関わる時，各自の肉体の持つ癖，ゆがみ等が垣間見られる。

次に，私が，土方舞踏[※2]の本質メソッドであると考える，'己れを消すこと'。己れの肉体を己れが管理するのではなく，例えば，仏像を幾万本の木目で切ると，その姿を消してしまうように，方法として，イメージされた仏像の木目により，己れの肉体を消す。さらに，イメージされた数知れぬ神経の糸に引かれ，'何ものでもない存在'へと導かれるための導入－「歩行」へと移行する。全てを包含する目，頭から出る神経の糸，歩かされている自分。シンセサイザーの地鳴り音と共に，青い目，金色の髪，長い手足の男女がこの時，まるで夢遊病者のように'歩かされている〈私〉'となった。

「風で歩いてごらん」「霧になりなさい」と言葉をかけ，次第に歩行から即興へと移行させる。8歩づつ歩かせながら，「粘土になりなさい」「ガラスになりなさい」。音楽はブライアン・イーノの太鼓。しかし，このような言葉がけをしても，質感を変えることはできにくいようであった。

続いて，動物の一態，「にわとり」の即興－にわとりの声を出す ── の予定だったが，これは時間が足りずにカット。

ここで，今回のテーマとした型[※3]のメソッドに入

る。

土方の舞踏メソッドは，部分の動きが重要で，細部がどんどん変わっていくことによって，全体像が浮かび上がる。そして，その細部の変化に，‘神経の糸’，‘俯瞰する眼’等を用いて流れをつなぐ。

以下，土方の具体的な細部メソッドを教える。

○目の動き── 使用曲サティ

「三日月」「同心円」「big fish in the sky」「光玉」「鳥の巣」「めくら」といった型

○手の動き── 歌曲を用いて

「きせる」「くし」「あごの手」「手むすび」「カップを持つ」「枝」「かんざし」「くちべに」「タオル絞り」「ストップ」「歯で糸を切る」「かおの輪郭」「髪の毛パヤパヤ」「だんごっ鼻，鼻かくし」「雨三本」「常磐御前」等の型

○歩き── 歩行の展開として，以下の一連の動き。曲“タンジェリン・ドリーム”

①頭蓋の木枝が折れる。ポキ。

②鼻が耳になる。

③こめかみから鳥が飛び立つ。パタパタ。

④足元から虫が這い上がってくる。

⑤その虫を潰しながら歩く。ジャリジャリ。

統合的なものとして，「三日月」から「鳥の巣」「めくら」「…ジャリ，ジャリ」「頬のけいれん」「小指のピクッ」「喉ゴックン」「背中でスプーンが落ちる音，カチャリ」「頭蓋の木の葉がカサカサ」「歩こうとして体の中にカチャッと鍵のかかる部屋がある」「歯痛シーシー」「首筋を這うなめくじ」「足元を飛ぶバッタ」「空間のひげ」「馬の首」「手が蔦になっていく」「へんな微笑」「そのまま逃げる。バイバイ」と一連に動きを指示する。

土方独自の詩的な言葉が，果たして英語で，どこまで通じたか，心配であった。が，具体的な型をつなぐことが，受講者には理解しやすかったようで，最後に2組に分かれて通しで動いて貰うと，そこにまがりなりにも‘舞踏’が出現した。

しかし，「舞踏のエッセンスだけを教えて」といった言葉には，舞踏のもつ精神性が3時間などで語れるはずもなく，「命が形に追いすがる」とした土方の形式もまた，この様な方法で伝えてよいものかという疑問が残った。こうしたことを踏まえての土方巽の心と形式については，今後の私の課題である。そして，このワークショップ中，私は，師土方が，いつも私を見ていてくれたような気がしてならなかった。

ワークショップ終了後，「このメソッドは，アルビン・ニコライの方法に似ている」とか，誰とかの方法に近いといった声も聞かれ，初めてのものを習う時，共通性を探すという人間の癖ばかりではなく，何か舞踊において，Primal bodyを探る方法には共通項があるのかもしれないと感じた。

●プログラムの中のブトー

ブトーに関するものとして，ニューヨークBroockportのSunny College教授Sundra Horton Fraleighさんの“Body, Dance and Culture”の講演。この講演の中で，彼女は来日した時に会った舞踏家・大野一雄の，「Western dance is too violent, too intellectual. Dance should be innocent, intoxicating.」という言葉に強い印象を受けたと語った。また，大野の，「テクニックには興味はないが，弟子のPrimal Bodyを見つける為にダンスを教えたい」という言葉を引用して自身の舞踏観を述べ，最後に，大野とイサドラ・ダンカンの共通性に触れ，「大野もダンカンもダンスを創る人であり，新しいダンスの母」と論じた。

また，シンポジウム“Reflecting Culture; Aesthetic Perspectives”はダンス理論家のEvan Alderson，ダンサーで人類学者Joan Kealinohomoku，芸術哲学者Francis Sparshottらの討論。このシンポジウムでは，フランスで行なわれた舞踏の山海塾の公演をめぐっての論議があった。「ブトー（舞踏）の解説は可能か」「その解説を翻訳するならば，翻訳家のブトー認識の深さ，文化的背景の知識の必要性」に言及。「ブトーは自分自身で感じるものだからtranslateしにくい。Dance exists in its own way.」といった意見の後も延々と議論が続いた。そして，参加者の「ダンスは言葉によって判断できるものではなく，感じるもの」という意見に，会場から大きな拍手がわき，語彙の増殖に終止符が打たれた。

●日本からの参加

日本からは，奈良女子大の平井タカネ先生の，“The Meaning of The Movements of The Shrine Maiden Dance・Rice Planting Dance of Kasuga Shrine”の講演と，御都合で御欠席になられたが，お茶大名誉教授・松本千代栄先生の“Films on Relationships between Movement and Images”のプログラムが行なわれた。

平井先生の発表は，〈舞踏〉のワークショップと重なったために残念ながら出席できなかった。松本先生のフィルム上映の様子を御報告する。この上映会には，教育のプログラムとして，30名程が参加，上映後，「日本の子供たちは，皆こんなにダンスが上手なのか」「日本の学校教育にもテクニックのクラスがあるのか」「音楽は，西洋のものと日本のものとの選択に意味があるのか」「作品‘静御前’ではグラハム・テクニックが使われているが，大学でグラハム・テクニックを教えているのか」といった質問が矢継ぎ早に発せられ，

日本の舞踊教育に対する関心の高さが示された。が，松本先生御欠席のため，論の進展が望めず，参加者はとても残念がっていた。

●心の交流

ここで会議の進行について若干触れておく。用意されたプログラムが64もあり，しかもこれが同時多発的に行なわれたから，参加者は，会場に当てられたホテル内を次から次へと息つく間もなく，各自のスケジュールに合わせて移動するという慌しさ。そして，この移動のための短い時間が友好を深める時間でもあり，情報を得ることができる時間でもあった。例えば，オリジナルのノーテーションを編み出したというカリフォルニアから来たValerie Suttonさんは，廊下ですれ違う人たちをつかまえては自分の仕事を説明し，中には2度つかまり「あ，あなたにはさっき言ったわね」と言われた人もいたようだが，彼女のような精力的な人たちがあちこちに見られた。

私もサリーを着たインドの婦人に「以前，フェスティバルでブトーを見て興味を持ちました」と話しかけられたり，忙中閑ありの和やかなものがあった。

昼食会には子供を連れて現われた参加者もいて会議参加者の大半が女性という性構成らしい，ほほえましさのあるものであった。

また，プログラムの中でも，“Recollections ; The Expressionist Period” という招待レクチャーで，1907年生まれのヴィグマン学校の教師だったFrau Til Thieleさんの語るドイツ表現主義時代の想い出には皆感銘を受け，彼女への敬意を表しての花束贈呈では，ともに舞踊を愛する先輩への拍手が鳴りやまなかった。

●‘トリオA’

私にとって最も印象深かったのは，“Meaning and Movement ; A Reflection on ‘Trio A’”というワークショップである。ノース・カロライナ大のJohn Gamble教授ら男性2人，女性2人が，アメリカ・モダンダンスの代表的な存在であり論客でもある，イボンヌ・レイナーの1966年の作品‘Trio A’を‘Readers theater’というスタイルをとってperformanceを行なった。これは，3人がレイナー振付けの‘トリオA’を踊り，残る1人が椅子に坐って，各自の動きと意味についての論文からの引用文を読みあげ，順次，踊る人と読む人が代わっていくという形式であった。

‘トリオA’のパフォーマンスと4つの論文を織り混ぜることで，彼らは，ダンスのパフォーマーと振り付け家が，ダンス学者と美学者として同じ問題について語ることを示そうと意図したようである。

読みあげる論文をsoundにして── 腕をスイングする，片足を滑らかな弧線に打ちつけ，他方の足はサイドへのばし小さな円運動…座って後ろへ転がり…── といった抑揚のない運動が，振りの重さによって止まることなく連続する。まさにレイナーの言う‘中立的な行為者’となった舞踊家たちが，肉体的toneを同じにし，ペースを保つことに集中することで，コントロールされた，非常に完成度の高い作品を作り上げていた。ワークショップの後で，論文に引用されたレイナー自身の論文の誤読についての質問などもあった。が,「心は筋肉である」と言うレイナーの作品をとりあげた演者たちが「初めは面白くなかったこのワークショップの稽古が途中からとても面白いものになった」という感想を述べた。私はこの「面白くなった」という意味を考えることが，今後のモダンダンスの行方を探るキーにもなるのではないかと思った。

●多方面の問題提起

“The Black Aesthetic”のシンポジウムでは，Garth Fagan教授から「このBlackというタイトルは問題だ。自分はあらゆるダンスから影響を受けており，Blackという限定のされ方はおかしい」というクレームがつけられた。

また，“Dance Theater in Contemporary Culture”のシンポジウムでは，Johannes Birringer, Roger Copeland, Michele Febre, Jochen Schmidt, Grant Strateら，米，仏，独，加のパネラーたちが，Dance theaterの定義づけを試みた。ドイツ人は，ピナ・バウシュをDance theaterとし，「ブトーはDance theaterじゃないのか」の問いには，「そうかもしれないけど，よく知らないからわからない」と答え，私はその正直さに思わずプッと吹き出してしまった。

・また,“Dance Gender and Culture”では，Nikolais schoolで踊り，研究したDonald Blumenfeld—Jonesさんが，「小さい頃，女の子はダンサーになるというとステキね，と言われるのに，ダンサーになるという男の子は変な目で見られる」と語った。他にダンスの意味をフェミニズム理論を用いて論じていたグループもあった。

●フィルム上映，他

ダンスフィルム上映では，ヨーロッパの若手のAnna Marie de Keersemaker，新しい活動を続けるHenrik van Diek，カナダのLa La Human Stepsなどの面白いモダンダンスの存在も知り，国際会議ならではの情報として貴重なものだった。

更にインドのカタカリのワークショップや中国古典舞踊，ジンバブエ，イエメンなどの民族舞踊についてのレクチャー，ワークショップやコンピ

ューター利用による運動分析，及び振りつけなどに興味をひかれた。

今会議のワークショップは，相対的にダンサーの調整のためのプログラムが多く，発表されたものは，ノーテーションに関するものが目立ったようだった。

●“ダンサーの転職”

プログラム“Dancers in Transition”が，Joysanne Sidimusさん（カナダ：Dancer Transition Centre. exective director，元ニューヨークシティバレエ，カナダ国立バレエのプリマ）の問題提起の後，質疑応答形式で行なわれた。タイトルが示すように，ここで取りあげられた問題は，ダンサーであれば誰もが直面する〈踊れなくなった後〉，切実なテーマだけに質疑応答にも熱が入ったものだった。自殺，精神障害，アルコール・ドラッグ依存など，踊れなくなったダンサーたちの悲惨な現実が出席者の口から具体的に語られ，そのことによって，この問題の抱える深刻さが浮き彫りにされた。限りある肉体で踊るダンサーにとって第２の人生が始まるのは早く，転機にあるダンサーの精神的，財政的援助を行ないながら，ダンスキャリアの次の段階へのスムースな移行を手助けしているという，Sidimusさんの仕事もまた，その問題同様に参加者の注目を集め，かつ評価された。同時に，ダンサーという職業についての問い直しもあり，「大学はプロダンサーを養成するところか」という疑問が提示された。

以上のように，今学会は，元ダンサーの研究者が多数出席したためか，プログラムも“ダンサーの転職”に代表されるような，身近かなものが多かった。そうしたこともあり，私にとっては，初めての国際会議も興味深く，楽しいものとなった。また，舞踏のワークショップは，体と表現をつなぐ始源の世界へたちもどって考える場となった。この経験を生かし，今後の研究を進めていきたい。

※１中嶋夏――霧笛舎代表。舞踏初期メンバー。現在欧米にて活躍中。私とは土方巽の姉妹弟子の関係にある。
※２土方メソッドの本質を‘肉体の出現の自在性’にあると，現段階で私は考えている。
※３このプログラムは，土方の多数の型の中から抜粋構成したものである。